ねん がつ にち
2020年7月11日

ねんかんだい しゆじつ
年間第15主日

きく ち いさおだい し きよう せつきよう
菊地功大司教 ミサ説教

かみ こと ば じゆにく しん び ひと
神の言葉は、受肉の神秘によって人となられたそのときから、いま いた
わたしたちとともに現存しています。人となられた神の言葉である主イエスを
つう ちよくせつかた こと ば ひ び せいしよ ろうどく つう じて きようかい おし つう
通じて直接語られたその言葉は、日々の聖書の朗読を通じて、教会の教えを通
じて、てんれい つう じて いの つう じて く かえ つた
じて、典礼を通じて、祈りを通じて、繰り返しわたしたちに伝えられてきまし
た。

だいに こうかい ぎ けい じ けんしやう する
第二バチカン公会議の啓示憲章にこう記されています。

「きようかい せいしよ せいでん とも みずか しんこう さいこう きじゆん
教会は聖書を聖伝と共につねに自らの信仰の最高の基準としてきたのであ
り、またそうしている。なぜなら、かみ れいかん う いち ど かぎ えいきゆう も じ する
神の靈感を受け一度限り永久に文字に記
されたせいしよ かみ じしん か つた よげんしや
聖書は、神ご自身のことばを変わらないものとして伝え、また預言者た
ちと使徒たちのことばのうちにせいれい こえ ひび
聖霊の声を響かせているからである(啓示憲章
21)」

すなわち、さまざま で き こと とき なが なか きざ れきし かたちづく
様々な出来事が時の流れの中で刻まれ歴史は形作られてきたので
すが、そのあいだつね かみ こと ば とき なが なか げんぞん
間常に神の言葉は時の流れの中に現存していました。しかし世界
のげんじつ かみ こと ば みみ かたむ
現実は、神の言葉に耳を傾けてこようとはしませんでした。時にはみみ かたむ
耳を傾
けようとしたこともあったのでしようが、それはれいがい すく
例外です。少なくともいま いた
至
るまで、かみ のぞ かみ せい かい じつげん かみ あい こ そうぞう
神が望まれる世界は実現しておらず、神が愛を込めて創造されたいの
ちはきき きき
危機にさらされ、人間の尊厳はないがしろにされ、かみ に すがた
神の似姿がその尊厳
をぼうりよくてき うば と じれい せい かい かずおお み
を暴力的に奪い取られる事例は、世界に数多く見られます。

わたしたちのくに あつても、きんねん かずおお
近年、数多くのいのちが孤独と孤立のうちに危機
にちよくめん こんぼん かんせんしやう かくだい けいざい こんらん なか こよう
直面しており、とりわけ今般の感染症が拡大し経済が混乱する中で、雇用
のふ、あんてい ぞうだい じゆうぶん たす え
不安定さが増大し、いのちをつなぐために十分な助けを得られることなく

こりつ ひとり すく
孤立している人も少なくありません。

もちろん社会には、教会の信徒をはじめとして多くの善意の方々が、積極的に助けの手を差し伸べており、そういったボランティア活動の団体も多く存在しています。東京教区の災害対応チームでも、そういった支援を提供する団体などの情報を集めて、インターネット上で提供していますが、数多くの善意の方々が存在しているという心強い現実を、そういった情報収集から垣間見ることができます。善意の多くの方の存在を知り、その心配りに感謝するとともに、それでもまだ取り残されているいのちがたくさんあることを思わざるを得ません。

また今般の事態にあつて、特に医療関係者の皆さんには、常日頃心にかけておられることであろうと思いますが、たまものであるいのちを守るために、日夜尽力されておられることに、心から感謝申し上げたいと思います。

かみ じつかい だいご おきて
神の十戒の第五の掟は、「殺してはならない」と定めています。

この掟はすなわち、わたしたちに「人間の生命が神聖である」ことを教え、いのちを守ることの重要性を認識することも求めています。カトリック教会のカテキズムには、第五の掟の箇所に、「道徳律は、重大な理由もなく誰かを死の危険にさらさせること、さらに、危険な状態にある人を見捨てることさえも禁じています(2269)」と記されています。

こんばん かんせんかくだい じたい
今般の感染拡大の事態にあつて教会が取り入れている感染症対策は、「感染しない」ことだけではなく「感染させない」ことも重要視していると、常々申し上げてきた背景は、そこにあります。「殺してはならない」と神から命じられているわたしたちは、他者をいのちの危険にさらすことも、危険な状態にある人を見捨てることも、禁じられているからです。

神の言葉は、この世界の現実のなかであって、様々な方法を通じて幾たびも幾たびも繰り返され響き渡っているにもかかわらず、世界全体には浸透していません。

ヨハネ福音の冒頭に、「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった(ヨハネ一章10.11節)」と記されているとおりであります。

耳を傾けようとする人の心に蒔かれた神の言葉の種は豊かに実を結び、善意の人を駆り立て、助けを必要としているいのちへ、危険な状態にあるいのちへと、その思いを向かわせます。残念ながら、神の言葉の種は、まだ多くの人の心のうちで、豊かな実を結んではいません。

この危機的な状況の中で、これから今以上に孤立を深めながら危機に直面するいのちは増えていくことが想定されます。ですから、わたしたちは、ただいている神のいのちの種を、蒔き続けなくてはなりません。さらには、蒔かれた種が豊かに実を結ぶようにと、その土壌を良いものとしておく努力も必要です。ただただひたすらに種を蒔き続けるだけではなく、まずは最初に種が蒔かれる土壌を良いものに変えて行く努力も必要です。種を蒔く前に、しなければならぬ準備もあります。

その準備、すなわち土壌改良を成し遂げるのは、わたしたち一人ひとりの日々の生活における、言葉と行いによる神の愛とつくしみのあかしであります。人とのかかわりの中で、わたしたちの言葉と行いは、神の言葉の種が蒔かれる土壌を良いものとしていくための、もっとも力のある道具であります。

語られる言葉は、わたしたちの口から出る実際の言葉であると共に、わたした

ちが、例えばインターネットなどに残していく言葉でもあります。時にクリスチャンを標榜しながら、他者のいのちを守ることをないがしろにするような、きわめて利己的な主張や攻撃的な主張を目にするとき、いったいどのような土壌を神の言葉の種のために備えようとされているのかと思います、悲しくなることがあります。わたしたちは口から語る言葉、書き記す言葉、どちらにあつても自分の言葉が、神の言葉の種を蒔く土壌を準備するためなのだと、常に心しておきたいと思えます。

「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」

神は自らの言葉が、その使命を果たさないままに、むなしく戻ってくることはないと言明されています。人となられた神の言葉である主イエスによって、神の言葉はわたしたちの間に現存されています。現存されているのですから、どのような困難にあつても、必ずその使命を果たされます。

この神の約束に信頼し勇気をいただきながら、小さな歩みではありますが、わたしたちの言葉と行いを通じて、多くの人々の心の土壌を改良し、そこにまかれる神の言葉の種が豊かに実を結び、それを通じて神が愛されるすべてのいのちが大切にされ、守られ、その尊厳が尊重される世界が実現するように、努力を続けてまいりましょう。